

場所句倒置構文の派生について

野 地 美 幸*
(平成9年4月30日受理)

要 旨

英語の場所句倒置構文に現われる場所句は話題要素の特性を示す一方、動詞に後続する意味上の主語と主語的の特性を分かち合っている。場所句を話題要素と見なすと主語的の特性が説明されず、名詞句の主語と同等に見なすと話題要素の特性が説明されない。本稿では、Chomsky (1995) のミニマリスト・プログラムの枠組みで場所句倒置構文の構造及び派生を明らかにし、この枠組みで提案されている仕組みを活用することで場所句倒置構文のこれまで問題とされてきたさまざまな特性を導き出すことができるということを示す。

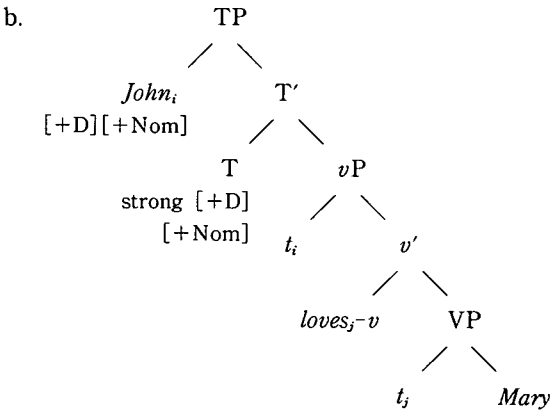
KEY WORDS

locative inversion	場所句倒置	minimalist program	ミニマリスト・プログラム
topicalization	話題化	feature checking	素性照合

0. は じ め に

Chomsky (1995) のミニマリスト・プログラムの枠組みでは、移動は（移動される要素自体に動機付けがあるのではなくて）C, Tといった非実詞的（nonsubstantive）要素に含まれる解釈不可能な素性が誘発するもので、その素性が強い場合には顕在的移动を引き起こす、と考えられている。例えば、(1a) のような文は (1b) のように分析される。

(1) a. John loves Mary.



* Division of Languages, Department of Foreign Languages.

主語に着目してみると、John はまず [Spec, *v*P] の位置に生成され、そこで意味役割が決定される。[Spec, TP] の位置へ移動するのは T の強い D 素性が同じ素性を持つ要素、すなわち DP、を牽引 (attract) するからである。T の D 素性は移動してきた DP (John) と指定部—主要部の関係の下で照合され、消去される。また、ついでに格素性の照合も行われる。T の D 素性は DP 以外の要素を牽引することがないので、この分析は主語位置に現われうる要素が名詞句 (DP) に限られることを予測する。(2) のような例文に関してはこの予測は正しいものと思われる：

- (2) a. (*In) San Francisco makes me happy.
 b. It makes me happy in San Francisco.

(2) は前置詞句 (PP) が主語位置に生じないことを示している。動詞の意味上の主語が PP として実現した場合、(2b) のように、主語位置には虚辞の *it* が現われる。(2a) の San Francisco も (2b) の *it* も共に DP である。

では次のような例文を考えてみよう。

- (3) a. Into the room came a pretty woman.
 b. A pretty woman came into the room.

(3a) は場所句倒置 (Locative Inversion, 以降 LI) 構文で、通常の語順 (3b) と比べると主語と前置詞句の位置が入れ替わっている。英語では本動詞の T への顕在的移動は無いので (Pollock (1989), Chomsky (1991)), (3a) の動詞も動詞句内に留まっていると考えられる。動詞が動詞句内にあるとすると、(3a) の a pretty woman が主語位置にある可能性は排除される。では、(3a) のような倒置構文の主語位置はどんな要素に占められているのだろうか。(3a) で動詞の前に現われている要素という PP であり、一つの可能性として主語位置に現われている要素は PP であるとも考えられる。しかし、(2) で見たように、英語では通常 PP は主語位置に現われない。一方、(4) のように文中には必ず主語が現われなければならないという要請 (EPP 効果) もある：

- (4) *(for it) to seem that John is guilty would upset Mary. (Safir (1985: 35))

ここで seem は外項を取る動詞ではなく、また T は格素性、 ϕ 素性等を含んでいない。それにも拘らず、(4) の不定詞節の主語位置には虚辞が存在しなければならない。これは T がその指定部に何らかの要素を必要とするからで、(3a) のような文でも主語が存在しなければ非文となることを示唆している。

(3a) のような LI 構文の文法性を説明するには、このジレンマ、すなわち、PP が主語として生起しえない一方で文中における主語の存在は義務的であるということ、を解決しなければならない。本稿では、Chomsky のミニマリスト・プログラムの枠組みで、LI 構文の構造及び派生を検討して行きたい。

1. 基本的事実

1.1. 話題化との類似性

LI 構文の具体的な分析の検討に入る前に、この構文の特性を把握しておく必要があるだろう。これまでの研究により (とりわけ Emonds (1976), Coopmans (1989), Bresnan (1991)), LI 構文に現われる PP は話題要素的特性を持つことが明らかになっている。まず、PP の話題要

素的側面から見て行くことにしよう。

1 つには、LI は叙述述語の補文内で起こることはなく、話題化と同様の振る舞いをする：

- (4) a. In came John.
- b. *I noticed that in came John.
- (5) a. Each part John examined carefully.
- b. *I fear (that) each part John examined carefully.

(Emonds (1976: 29-31))

Emonds (1976) では、LI (彼の用語を用いれば‘Directional Adverb Preposing’) は、話題化と同様、根変形と見なされ、埋め込み文では生じないとされている。しかしながら、Hooper and Thompson (1973) が指摘しているように、実際は補文内でも LI を可能とする動詞もある：

- (6) a. The scout reported that beyond the next hill stood a large fortress.
- b. It was written in the plans that over the entrance should hang the gargoyle.
- cf. *That over the entrance should hang the gargoyle was written in the plans.

(Hooper and Thompson (1973: 474, 476))

ここで重要なのは、埋め込み文においても、LI が起こりうる環境と話題化が起こりうる環境が一致していることである：

- (7) a. It was decided that this building it would be demolished.
- b. *That this building it would be demolished was decided.

(Hooper and Thompson (1973: 476))

(4b), (5b) の主節の動詞が叙述動詞であるのに対して、(6b), (7a) の主節の動詞は共に非叙述述語で断定節を補部を取る動詞として特徴付けられる。この LI と話題化の類似性は、LI 構文の PP が一種の話題要素となっていることを示唆するものである。

PP の話題要素的側面を示す 2 つ目の点として、LI が適用された文にさらに話題化を適用することはできないということが挙げられる：

- (8) a. Into that house ran the boys.
- b. *That house into ran the boys.
- c. *The boys into that house ran.

(Emonds (1976: 40-41))

(8a) は LI 構文である。(8b) は (8a) の that house を、そして (8c) は (8a) の the boys を、それぞれ話題化することにより生成される文であるが、共に非文となっている。この事実もまた、LI 構文の PP が話題要素となっていることを示している。

1.2. 主語特性

LI 構文では、PP が主語的振る舞いをすることもあれば、後続して現われる意味上の主語が主語的に振る舞うこともある。まず、PP の主語的性質に着目してみよう。LI 構文の PP は、名詞句の主語と同様、繰り上げに従う：

- (9) a. On this wall is likely to be hung a portrait of our founder.
- b. A portrait of our founder is likely to be hung on this wall.

(9a) の on this wall も (9b) の a portrait of our founder も埋め込み文の主語位置から移動してきたと考えられる。

さらに、付加疑問文では、意味上の主語を受ける代名詞が現われるのではなくて、there が現

われる：¹⁾

- (10) a. In the garden is a beautiful statue, isn't there?
b. In the ocean are whales, aren't there?

(Bowers (1976: 237))

また、LI 構文の意味上の主語が示す主語的性質として、1 つは、定形動詞と一致するということが挙げられる：

- (11) a. In the room was/*were found a child.
b. In the room *was/were found two children.

(11) で be 動詞と一致を示すのは後続する名詞句である。

2 つ目に、主格を付与される要素も前置した PP ではなくて意味上の主語と考えられる：

- (12) a. Into the room walked John.
b. Into that house ran the boys.

(12) は (不定名詞句ばかりでなく) 定名詞句も LI 構文の意味上の主語になれることを示しており、(13) と対照をなす：²⁾

- (13) Into the room there sauntered a/*the troglodyte

(Bobaljik and Jonas (1996: fn.36))

(13) は前置詞句を話題化した there 構文であるが、意味上の主語は不定名詞句でなければならない。(12) で定名詞句が生起可能であるということは、LI 構文の意味上の主語には部分格ではなく構造格 (主格) が付与されていることを意味している (Coopmans (1989), Watanabe (1993) と比較参照)。

このことを裏付ける証拠として次のような文が挙げられる：

- (14) *In this very room was discovered that cancer was caused by eating too many tomatoes.

(Levin and Rappaport (1995: 297))

(14) は名詞句の代わりに that 節が現われた LI 構文である。この文が非文となるということは、LI 構文の意味上の主語は名詞句でなければならないことを示している。つまり、LI 構文では意味上の主語が T の格素性 (構造格) の照合に参与する。

LI 構文の主語特性を簡潔にまとめると、繰り上げと付加疑問文の形成に関しては PP が主語として振る舞い、動詞との一致及び格付与に関しては意味上の主語が主語として振る舞うということが言える。

2. 先 行 研 究

1 節での LI 構文に関する基本的事実を踏まえたうえで、これまで提案されてきた分析をいくつか検討してみることにしよう。ここでは代表的なものとして次の 4 つの分析案を取り上げてみたい：

- (15) a. Collins (1997):
[_{TP} [_{PP} down the hill]_i T[rolled John *t_i*]]
b. Coopmans (1989):
[_{COMP} down the hill][_{e_i} INFL[rolled John *t_i*]]_s

c. 中島 (1996):

[_{TP}[_{PP} down the hill] John T[_{VP} rolled]]

d. Dikken and Næss (1993):

[_{TOP}[_{PP} down the hill]_i]_i[_{IP} t'_i...[_{VP} rolled[_{sc} John t_i]]]

(15a) は、PP が T の EPP 素性により牽引されて [Spec, TP] へ移動するというものであるが、範疇素性 P も T の EPP 素性になりうるということを前提としている。この Collins の分析は、PP を名詞句の主語と同等に扱うことから、PP の主語的側面 (9, 10) は説明できても話題要素的側面 (4, 6, 8) が問題となる。また、((15a) を仮定すると一見問題となる) (2a) に関しては T の格素性が照合されずに残ることから非文法性を説明するにしても、次のような文が誤って生成されてしまう：³⁾

(16) *I expect on this wall to be hung a portrait of our founder.

(Bresnan (1991: 56))

LI 構文の PP は名詞句の主語と必ずしも生起しうる位置が一致しない。⁴⁾ (16) もまた、PP の話題要素的特性と見なされるであろう。

(15b) の Coopmans の分析は LI を話題化として捉えている。主語位置には空の虚辞的要素が生起している。この分析の下では、PP が純粹に話題要素として振る舞う。したがって、(15a) の分析とは対照的に、PP の主語的側面 (9, 10) が説明されない。また、LI 構文の意味上の主語は動詞によって部分格が付与されると仮定しているため、(12) と (13) の対立も問題となる。

(15c) では、T の D 素性によって John がその指定部に牽引されている。PP はその外側の指定部に生起する。この中島の分析は、LI 構文の PP も意味上の主語も T の指定部に現われることから、それぞれの主語的特性を説明することが可能であり、同時にまた (T の外側の指定部に現われる要素が話題として振る舞うとすれば) PP の話題要素的特性も説明できる。しかしながら、(15c) が予測するのは PP DP V の語順であって ((Kayne (1994))), LI 構文の PP V DP という語順が説明されない。⁵⁾ 特に (9) のような繰り上げが適用された文に関して、PP と後続する名詞句が同じ T の指定部にあるとは考えにくい。

(15d) の分析は、Dikken and Næss (1993) で提唱された分析で、PP が一旦主語位置に移動しさらに話題化により前置されるというものである。この 2 種類の移動により PP の主語的側面と話題要素的側面は捉えられるものの、(15d) もいくつか問題を含んでいる。

まず 1 つは John の格照合に関してである。Dikken と Næss は素性照合を指定部—主要部の関係ではなくて姉妹関係に基づいて行われるものと仮定する。John は ([Spec, IP] へ移動し、I' と姉妹関係になる) PP の痕跡と姉妹関係にあることから I (正確には I') の格素性を照合することができるとされている。素性照合は同じ素性を持った要素間でのみ行われるものであるので、PP の痕跡と姉妹関係が成立するとは言え PP が格素性を含まない以上照合は起こりえない。

また、(15d) で PP がなぜ主語位置へ移動した後で義務的に話題化されるのかに関する説明にも問題が残る。彼らは PP を述部として扱い、述部が主語位置のように格照合の行われる位置にあってはならないことから話題化が義務的になると説明している。しかし、この言わば Stowell 流の説明が、(彼らも仮定している) ミニマリスト・プログラムの枠組みで有効であるとは言い難い。というのは、照合の仕方に問題が残るものの I の格素性は、照合を終えた後に消去され、

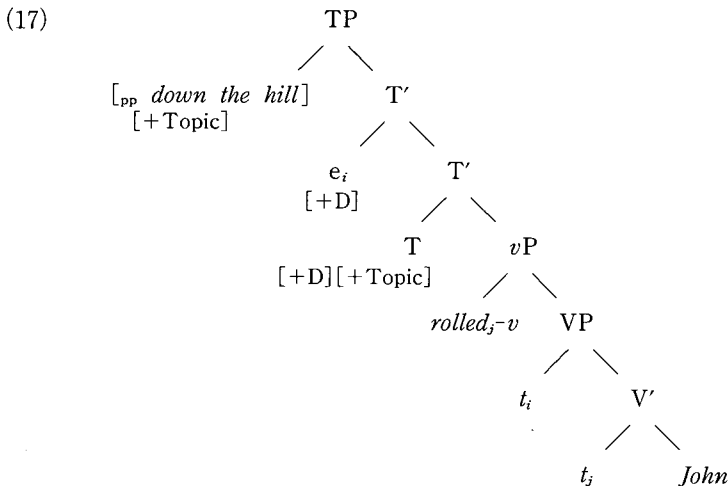
LFには残らないからである。PPが「格位置」に生起することを排除できないのであれば、仮に(15d)で話題化が起こらないとしても問題は生じない。しかし、話題化が義務的に生じるようになっていなければPPの話題的特性は説明されない。

以上、LI構文に関する先行研究をいくつか見てきたが、いずれの分析も理論的もしくは経験的問題を含んでおり、修正等が求められる。

3. 代 案

3.1. LI構文の構造

1節で見たLI構文の話題化との類似点および主語特性を説明し、なおかつ2節で見た先行研究の問題点を克服するために、ここではLI構文を次のように分析することにする(素性はTの強素性の照合に参与するもののみ記入)：



ここで空範疇 e は、虚辞の *there* のように格素性も ϕ 素性も持たない DP で、動詞の意味役割(場所)を担う項である。⁶⁾ Tの[+D]素性がこのDPを牽引する。しかし、 e の同定(identification)のために、その意味内容と合致する要素(PP)が先行詞として、 e をc統御する位置に、存在しなければならない。Tが[+D]のほかに[+Topic]を強素性として含んでいる場合、PPがその外側の指定部の位置に非項として挿入される(Tが話題素性を含む可能性については野地(1997)を参照)。Tの格素性と ϕ 素性は、LFでJohnの(格素性と ϕ 素性を含む)形式素性(formal feature)がTへ付加することにより、照合される。

(17)の e は話題化文だけではなくWH移動の適用された(18a)のような文を派生するためにも必要となる要素である：

(18) a. In which garden stands a fountain?

b. *In which garden does the fountain stand?

(Bowers (1976: 231))

(18a)でa fountainが主語位置を占めているのであれば(18b)が生成されるはずである。これまでの議論で明らかのように典型的な主語位置にPPは生じないので、(18a)の疑問文の主語位置にも(17)で仮定した空範疇が存在し、WH句を先行詞として取っていると考えられる。

また, Bresnan and Kanerva (1992) によればアフリカのバンツ語の1つ Chichewa の LI 構文では, 英語の LI 構文とは異なり, 場所句が名詞句の主語と同じ振る舞いをするという。この考察が正しいとすれば, (英語には音形を持たないものしか存在しないにせよ) (17b) の e に相当する, 場所を表わす DP が存在することを示している。⁷⁾

(17) の e が場所を表わす項であると仮定することにより, 先行詞として可能なのは場所句のみで, 他の様態等を表わす PP が先行詞になれないことが自然に導き出される:

- (19) a. With great care John walked into the room.
b. Despite the cold Mary ran into the room.

(Coopmans (1989: 737))

したがって, LI を可能とする動詞でも場所句以外の PP が倒置を引き起こすことはない。Coopmans (1989) ではこのことを説明するために, 付加部の PP は項の PP とは異なって音形を持たない主語 (意味役割を担わない虚辞的要素) を認可しないと仮定しているが, ここでの分析ではそのように仮定しなくても説明可能である。

(17) では T が [+Topic], [+D] という2種類の強素性を含んでいると仮定したが, [+D] 素性の照合が先に行われれば(17)の LI 構文が派生される。では, [+Topic] の素性照合が先に行われたらどうなるであろうか。PP の挿入が先に行われるので次のような文が生成される:

- (20) *_{[TP e_i [_{PP} down the hill] T [_{VP} rolled t_i John]]}

この構造では PP が e を c 統御しないので, e の内容が復元されず解釈上問題が生じる。したがって(20)は LF で排除されることになるであろう。

また, (17) の e の代わりに PP が動詞の項として生成されれば, T の D 素性を照合できる要素は John のみであるので, 次のような倒置が起こっていない文が生成される:

- (20) [_{TP} John_i T [_{VP} rolled [_{PP} down the hill] t_i]]

(17) で John が主語位置に繰り上がらないのは e が標的 (target) により近い要素と見なされるからである。⁸⁾

3.2. LI 構文の話題化の特徴と主語特性

ではここで, 1 節で見た LI 構文の話題化の特徴と主語特性が(17)の構造を基にどのように説明されるかを見てみることにしよう。

(17) では PP が話題要素として生起している。これは, LI 構文が一種の話題化文であることを意味する。その当然の帰結として, LI が話題化が起こる環境でのみ許されることになる ((4, 6))。また, 同一の文中で LI と話題化が同時に適用されることはないということ ((8)) も, 照合される話題要素と T の話題素性は 1 対 1 対応になっていることから説明される。

さらに, (16) (= (21a)) の非文法性は, 不定詞節で話題化が起こらないのと同様に, 話題要素 PP の話題素性が照合されないことから説明される:

- (21) a. *I expect on this wall to be hung a portrait of our founder.
b. On this wall I expect to be hung a portrait of our founder.

(Bresnan (1991: 55, 56))

時制文の文頭では話題化が起こりうるので, (21b) のように PP が主節の文頭に現われれば容認可能な文が生成される。(21b) の埋め込み文の主語位置には e が存在し, T の D 素性を照合する。

次に、LI 構文の主語特性について考えてみよう。まず、PP が繰り上げに従うという現象 ((9a)) は、PP 自体ではなく e (DP) が EPP 素性を照合するために繰り上がることによって生じている：

(9a') [TP[PP On this wall] e_i [T is] likely [TP t'_i[T to][vP be hung t_i a poutrait of our founder]]]

また、付加疑問文で there が生じるという事実 ((10)) は LI 構文で主語位置を占めるのは PP 及び e であって、意味上の主語ではないことから説明される。

一方、動詞との一致及び T の格照合に関しては PP ではなく後続する意味上の主語が LI 構文の主語として振る舞うという事実 ((11, 12, 14)) は、(17) の分析において T の ϕ 素性と格素性を照合しているのは意味上の主語 (John) であることから導き出される。

以上、1 節で見た LI 構文の基本的特徴は全て (17) の構造を仮定することにより説明可能となることを示したことになる。最後に、2 節で指摘した先行研究 ((15)) の問題点が (17) の分析で克服されているかどうかを考えてみることにしよう。

(15) a. *Collins (1997)*:

[TP[PP down the hill]_iT[rolled John t_i]]

b. *Coopmans (1989)*:

[COMP down the hill][e INFL[rolled John t_i]]_s

c. *中島 (1996)*:

[TP[PP down the hill]John T[vP rolled]]

d. *Dikken and Næss (1993)*:

[TOP[PP down the hill]_i]_i[IP t'_i...[vP rolled[sc John t_i]]]

Collins (1997) の分析では、PP を名詞句の主語と同等に扱うことにより PP の話題要素的側面 (4, 6, 8) が問題となったが、上で見たように、(17) では PP を話題要素として扱うのでそうした問題は生じない。

Coopmans (1989) の分析では PP が示す主語特性 (9, 10) が問題となったが、こうした事実も、上で見たように、(17) の構造を基に説明される。また、LI 構文の意味上の主語が動詞によって部分格を付与されると仮定することによって問題となった (12) の事実も、(17) では意味上の主語が T の格素性を照合していることから説明がつく。

中島 (1996) の分析の問題点は LI 構文の典型的な PP V DP の語順を導き出すことができないことであった。ここで提唱する (17) では名詞句が T の指定部へ移動していないので、この語順の問題も生じない。

Dikken and Næss (1993) の問題点は 2 つ指摘した。1 つは、LI 構文に現われる名詞句の格照合が PP の痕跡との姉妹関係に基づいて行われるということである。(17) の分析は Chomsky (1995) の照合のメカニズムを採用しており、名詞句と PP との間で格素性の照合は行われていないので、この問題も解決される。2 つ目は、LI 構文の PP が義務的に話題化されることを保証できないという問題である。(17) の分析では、PP は非項の話題要素として挿入されているが、e に適切な解釈が与えられるためには先行詞が必要となる。したがって、PP の存在は義務的なものとなる。

このように、(17) の分析を仮定すれば、(15) に挙げた 4 つの先行研究の問題点は全て解消すると言って良いであろう。

4. ま と め

本研究では、LI 構文の構造として(17)を提案し、LI 構文の派生を明らかにした。(17)を仮定することにより、LI 構文の話題化的特性と主語特性がうまく導き出され、また、Collins(1997)等の先行研究の問題点も生じない、ということを見てきた。ここでの分析では LI 構文の PP が D 素性を持つといった極めて不自然な仮定を持ち込まなくても EPP 効果を説明することができる。また同時に PP と名詞句の主語との振る舞いの違いも説明される。

Chomsky (1995) は、移動というのは、移動される要素自体によって引き起こされるのではなくて、標的に含まれる、照合を必要とする一定の素性によって引き起こされるという立場を採っている。(17)の分析もまたそうした立場に立っているが、LI 構文に関するここでの分析が正しいとすれば、Chomsky のそうしたアプローチが正しい方向にあることを示していることになる。

註

*本稿をまとめるにあたって、池内正幸先生より貴重なコメントを寄せて頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

- 1) (ia) のような文は曖昧で、「ベッドの下に良い隠れ場所がある」という意味と「ベッドの下が良い隠れ場所だ」という意味の2通りに解釈できる。
 - (i) a. Under the bed is good place to hide.
 - b. Under the bed is good place to hide, isn't it?
 (ib) が示しているように、後者の意味の場合、付加疑問文でも there ではなくて it が現れる。したがって、存在を意味しないこうした文は LI 構文とは区別して議論する必要がある。詳しくは Jaworska (1986) を参照。
- 2) Coopmans (1989) でも同様の考察が行われている。
- 3) 時制節の T には必ず格素性(主格)が含まれ、その素性照合を必要とする。そうでなければ (i) を適切に排除することはできない：
 - (i) *John_i seems [that t_i is honest].
- 4) be 動詞が存在の意味を有していない場合、PP は不定詞節の主語位置に生起しうる：
 - (i) They considered after the holidays to be too late for a family gathering.
(Jaworska (1986: 359))
 このような位置に生起する PP は名詞句として振る舞っており、格素性の照合が行われる位置に生起しなければならないと考える(註1も参照)：
 - (ii) *It seema after the holidays to be too late for a family gathering.
- 5) 中島(1996)では(15b)の構造を支持する根拠として、(1) PP DP V の語順も可能である((i)), (2) LI 構文で空所化が可能であっても VP 削除は不可能である((ii)), (3) PP 内に照応形が現れる((iii)), ということを挙げている。
 - (i) Down the hill the baby carriage rolled.
 - (ii) a. Into John's office ran a student of physics, and out of Mary's room ___ a

teacher of chemistry.

- b. *Into John's office ran a student of physics, and out of Mary's room did ____, too.

(iii) a. By herself came a woman who had long wanted to socialize.

b. To their own house dashed the couple who got married only recently.

しかし、いずれも LI 構文の構造が (15b) であることを支持する強力な証拠にはならない。というのは、まず、LI 構文と (i) が同じ構造であるとは限らない。また、(iv) の例を考慮すれば、(iia) が可能だからといって LI 構文の PP と意味上の主語が T の指定部にあると仮定する根拠にはならない。

(iv) John ate an apple, and Mary an orange.

(iib) の非文法性は、a student of physics が T の指定部にあると仮定しなくても、VP 削除を行えば (did が現れている) T の解釈不可能な素性 (格素性や ϕ 素性) が残ってしまうことから説明できるであろう (VP 削除に関しては Lobeck (1995) を参照)。最後に、(iii) の例文も LI 構文の PP の話題要素の性質から説明されるであろう。つまり、話題化要素は再構築効果を示すので ((v)), PP が話題要素であれば、(iii) の例文においてその効果が現れるのも自然なことと思われる。

(v) Himself John likes.

したがって、(iii) は LI 構文の意味上の主語が T の指定部にあることを必ずしも意味するものではない。

- 6) Coopmans (1989) 等に従って、LI を引き起こす動詞は随意的に場所句を取ると仮定する。また、場所句を取る場合動詞は二項動詞として振る舞うので、軽動詞が付随して現れると仮定する。
- 7) 中国語でも場所句が名詞句の形で主語位置に生起しうるのである。詳しくは Huang (1987) を参照。
- 8) ここでは、近接性 (closeness) の定義として (i) を採用する：
- (i) β is closer to the target K than α if β c-commands α .

(Chomsky (1995: 358))

参考文献

- Bobaljik, J. and D. Jonas (1996) "Subject Positions and the Roles of TP," *LI* 27: 195-236.
- Bowers, J. (1976) "On Surface Structure Grammatical Relations and the Structure Preserving Hypothesis," *LA* 2: 225-242.
- Bresnan, J. (1991) "Locative Case vs. Locative Gender," *BLS* 17: 53-68.
- Bresnan, J. and J.M. Kanerva (1992) "Locative Inversion in Chichewa: A Case Study of Factorization in Grammar," in Stowell and Wehrli (eds.), *Syntax and the Lexicon*, Syntax and the Lexicon 26, Academic Press, New York.
- Chomsky, N. (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in R. Frieden (ed.), *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge.

- Collins, C. (1997) *Local Economy*, MIT Press, Cambridge.
- Coopmans, P. (1989) "Where Stylistic Processes Meet: Locative Inversion in English," *Language* 65: 728-751.
- Dikken, M.D. and A. Næss (1993) "Case Dependencies: The Case of Predicate Inversion," *LR* 10: 303-336.
- Emonds, J.E. (1976) *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure -Preserving and Local Transformations*, Academic Press, New York.
- Hooper, J.B. and S.A. Thompson (1973) "On the Applicability of Root Transformations," *LI* 4: 465-497.
- Huang, C.-T. J. (1987) "Existential Sentences in Chinese and (In)definiteness," in E.J. Reuland and A.G.B. ter Meulen (eds.), *The Representation of (In)definiteness*, MIT Press, Cambridge.
- Jaworska, E. (1986) "Prepositional Phrases as Subjects and Objects," *Journal of Linguistics* 22: 355-374.
- Jonas, D. (1992) "Checking Theory and Nominative Case in Icelandic," *Harvard Working Papers in Linguistics* 1: 175-196.
- Kayne, R. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge.
- Levin, B. and M. Rappaport H. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge.
- Lobeck, A. (1995) *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*, Oxford Univ. Press, Oxford.
- 中島平三 (1996) 「多重主語構文としての場所句倒置」, 『英語青年』1996年4月号: 18-22.
- 野地美幸 (1997) 「文主語構文と格照合」, 『英語青年』1997年7月号: 213-216.
- Pollock, J.-Y. (1989) "Verb Movement, UG and the Structure of IP," *LI* 20: 365-424.
- Safir, K. J. (1985) *Syntactic Chais*, Cambridge Univ. Press, Cambridge.
- Watanabe, A. (1993) "Locative Inversion: Where Unaccusativity Meets Minimality," ms., MIT.

On the Derivation of Locative Inversion Constructions

Miyuki NOJI*

ABSTRACT

The locative phrase in English locative inversion (LI) constructions shows topic-like properties and shares subject properties with the inverted subject. If the locative phrase, PP, is analyzed as occupying the subject position, [Spec, T], its topic properties cannot be explained. If it is analyzed as appearing in a topic position, on the other hand, its subject properties do not follow. This paper shows in the framework of Chomsky's (1995) Minimalist Program that the subject position of the LI construction is occupied by an empty DP which receives a directional θ -role from the verb and behaves like *there* in that it contains neither Case nor ϕ -features but can be attracted by the EPP feature of T. PP is inserted into the outer Spec of T as a topic, which functions as an antecedent to the empty category. By postulating such a structure for LI, we can successfully explain both topic and subject properties of PP.

* Division of Languages, Department of Foreign Languages.